

トーマス・マンとヘルマン・ヘッセの ゆかりの地を訪ねて IV

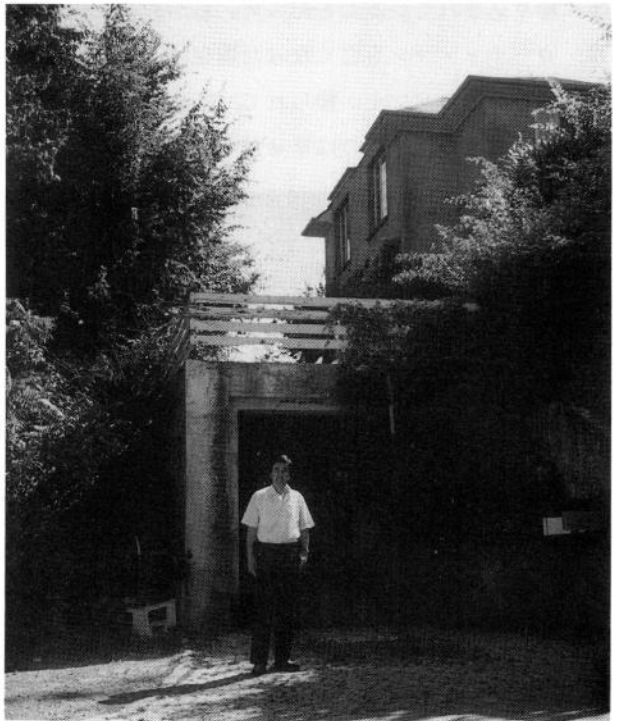
田 中 博

1) はじめに

ドイツ近代文学の巨星、トーマス・マンとヘルマン・ヘッセの文学作品からはじめて、やがて二人の友情へと資料をたどり始めると、その足跡は、二つの世界大戦という巨大な歴史の中で出会うことが出来る。私のこの第4回目の報告は、前回の1904年にミュンヘンで、出版社の招待で出会って後、第一次世界大戦終了までの、二人の足跡を中心に書きとめておきたい。その本論に入る前に、1987年8月に歩き廻った、スイスと西ドイツのことを少々報告して、はしがきにかえたいと思う。8月15日、ミラノのサンタ・マリア教会の食堂で修復中の、ダ・ビンチの「最後の晩さん」を見た後、スイスのチューリッヒにむかった。宿はリマート川の右岸で、中央駅からあまり遠くない所にあった。8月16日

(日) 今日、トーマス・マンの二つの家、キュスナハトの家とキルヒベルクの家、そしてキルヒベルク教会墓地にあるトーマス・マンの墓へ出かける。チューリッヒ中央駅から湖岸を走る郊外電車で、まず、スイス亡命後、はじめて住んだ、キュスナハトの家をさがしに出かけた。その家は、トーマス・マン日記 1933年—1934年 (1)の中で次のように記述されている。

33年9月25日 月曜日 チューリッヒ ホテル・ザンクト・ペーターにて
……きょうは、八時起床、Kと朝食。九時半、女流建築家との約束どおり「ベルヴェ」でキュスナハト行きのバスを待つ。ところがバスが来ない。そこは



写真(1) シートハルデン通り33番地 キュスナハト

始発地点ではなかったのだ。タクシーを拾ってシートハルデン通りに行くと家は開けてあり、女子事務員に迎えられる。家主の女性もあとで到着。広々とした作りのこの家の部屋部屋は、内装がまだ完全には仕上がっていなかったものの、きわめて感じがよく、安心して住めるという思いを抱く。(2)

キュスナハト市シートハルデン通り33番地の家は、チューリッヒ湖をはさんで、対岸には、マン最後の家となったキルヒベルクが遠望できる所にあつて、今日は人影もなく静まりかえっている。その地にある家が、マンの住んで居た家そのものであるかは確かではない。夏の日を抜けるような青い空と白いヨットの浮かぶ湖面に、太陽がキラキラと光り輝く景色は、チューリッヒ郊外の高級住宅街にふさわしいものだった。この家にはトーマス・マンは上述の日記によれば、ほんの短い仮りの住居のつもりだったようだが、結果は1938年、アメリカ移住の直前まで暮らすことになった。

湖岸の舟着き場に出て、キルヒベルクへ渡る舟を待った。定期観光船でキルヒベルクまでの短い舟遊びは、ヘッセが好きだったスイスの湖のボート遊びや、「ペーター・カーメチント」の世界であった。キルヒベルクへは、私は1977年の8月にすでに一度訪ねてきて、そのことは、この論叢でも報告済みである。前回とちがっていたのは、その後、日記ではK.と略号で書かれている、愛妻のカーチャ・マンが亡くなって、十年前には無かった、彼女の名が、トーマス・マンの名の下に彫り込まれていることだった。私が最初に訪ねた、アルテ・ランドシュトラッセ39番地の家は、カーチャ・マンも亡くなった現在は、誰れか新しい住人が住んでおられるのだろう、以前よりは明るい色のペンキが塗られて、若がえった明るい家に見える。ただまだその家が残っていて、再びみることが出来たのは幸せだった。



写真(2) トーマス・マンの墓

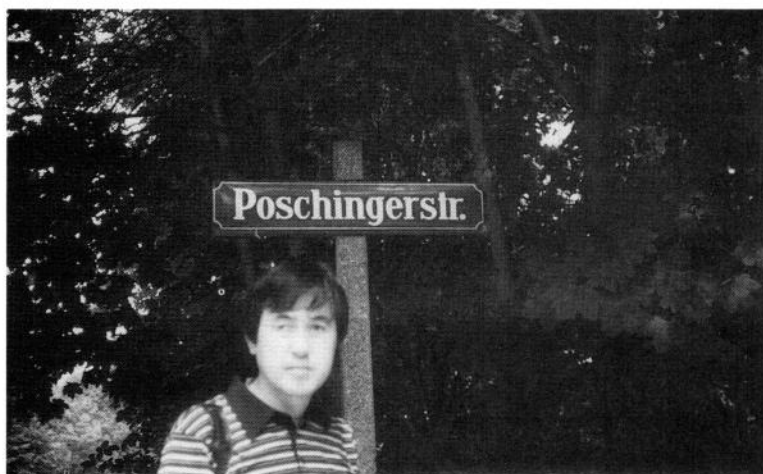
今回の旅行でどうしてもここに書きとめておきたいことがある。それは、8月18日（火）ルードヴィッヒ二世の名城、ノイシュパンシュタイン城の真下の宿を出て、通称、ロマンティシュ・シュトラッセと呼ばれる旧街道を、バスにゆられて北上し、ローテンブルグのマルクト広場の側のホテルで夜テレビにうつし出された年老いた一人の男の姿だった。西ベルリンのシュパンダウ戦犯刑務所で服役していた、ナチスの元副総統ルドルフ・ヘス（93才）が17日午後、自殺を図って死亡したというニュースであり、特集番組であった。ナチスに追われた作家トーマス・マン、それも、ヘッセとの友情を調べれば、二つの大きな戦争と深くかかわっている側面をもち、その調査旅行の最中に、現地でナチスの最後の大物の死を知って、強い感がいを持ったことだった。

2) 第一次世界大戦前後のマンとヘッセ

年 譜

	マ ン	ヘ ッ セ
1910年	『詐欺師フェーリクス・クルルの告白』の準備作業	小説『ゲルトルート』
1911年		詩集『途上』 インド旅行
1912年	『ヴェニスに死す』、『魔の山』の執筆開始	短編集『回り道』 ベルンに移る。
1913年		紀行『インドから』
1914年	第一次世界大戦始まる。ミュンヘンのポッシンガー通り一番地に新居をかまえる。	「在ベルン・ドイツ捕虜保護センター」で活動19年まで働く。
1915年	『フリードリッヒと大同盟——時局のための粗描』	小説『クヌルプ』 詩集『孤独者の音楽』
1916年		父の死。妻マリーアと三男マルテインの病氣。短編集『青春は美し』
1918年	『非政治的人間の考察』	
1919年	『主人と犬』『幼な子の歌』	小説『デーミアン』 評論『ツァラストラの再来』。ベルンからモンタニョーラへ移住。

短い年譜でも書いたように、第一次大戦の頃、マンはミュンヘン市ポッシンガー通り一番地に立派な家を建てて移り住んでいた。ヘッセは1912年にベルンの郊外のメルヒエンヴェーク26番地にある画家アルバート・ヴェルテイの死んだあとに住んでいた。第一次世界大戦をはさむ10年の間に音信があったのはきわめて数少ない。出版されている資料『ヘッセ・マン往復書簡集』の中にあるのは1910年4月1日付の書簡一通と1916年8月2日と1916年8月10日の葉書2通、計3通しかない。トーマス・マンの亡命生活の為に失われたヘッセの手紙があったと思われるが、それ



写真(3) ポッシンガー通り1番地 ミュンヘン市(1982年8月)

を想像してみても親しい関係とはいいいがたい。それどころか、彼等の立場や見解は、第一次世界大戦を間にして、むしろ反対の側にいたといった方がよいのではないだろうか。次にその立場を資料や葉書からさがしてみたいと思う。

3) ヘ ッ セ

第一次世界大戦に対するヘルマン・ヘッセの立場及び主張をもっとも良くあらわしている資料を二、三指摘しておきたいと思う。次の引用は、1914年11月3日の「新チューリッヒ新聞」に彼がはじめて公表した反戦の主張である。

O Freunde, Nicht diese Töne! —ああ、友よ、その調子の歌を止めて下さい! —

……その他に、又、戦争を書斎の中まで持ち込み、机上で血腥ぐさい戦争の歌を創り、戦争の記事をものし、その文章の中で国民の間の憎悪を煽り、憤ろしく、かき立てることによってこの偉大なる出来事に参与している手合いもあります。これは恐らく最悪の行為でありましょう。戦場にさらされ、毎日生命を賭している者なら、誰しも憤るための完全な権利を、一時的な怒りと憎悪を抱くだけの十分な権利をもっているでありましょう。又全て積極的な政治家だったら、同様に、仕方もない次第です。併し、私たち、その他の者、私ら詩人、芸術家であり、ジャーナリストたる者にとって、——この悪業を更に悪化せしめ、醜悪なる事や、悲しみ泣くべき事を更に増大せしめるのが、私達にとってふさわしい課題となりうることでしょうか?…… (3)

第二次大戦の後、西ドイツ大統領になったテオドール・ホイスは、その当時、ドイツ在住の知人で、数少ない支持者であったが、彼にあてた1915年1月4日付の手紙にも同様の主張が、次のように記されている。

An Theodor Heus

Bern, 4.1, 1915

……In punkto Krieg erlaube ich jedem Soldaten jeden Haß, jeden Enthusiasmus, selbst jede Roheit; dem Literaten, der daheim sitzt, erlaube ich sie nicht.
Mindestens tue ich nicht mit. Viel Gutes für Sie! (4)

1914年8月1日に始まった、世界第一次大戦直後のヘッセのもっとも直接的な心情をあらわしているように私は思える次の詩を引用したいと思う。

バガヴァド・ギータ (1914年9月)

また私は眠れないで、床の上に時を過ごした。
心は、わけのわからない悩みに満たされ、傷ついていた。

火災と殺人とが地球上に燃えあがり、
無数の人が罪もなく悩み、死に、朽ちるのを、私は見た。

私は心の中で、戦争に絶縁を宣した。
無意味な苦痛の盲目な神としての戦争に。

すると、その時、悲しい孤独の
記憶がひびいて来た。

そして、古い古いインドの神々の本が、
私に向かって平和のことはを語った。

「戦争と平和、いずれも同じことだ。
死は精神界には触れないのだから。
平和のはかりざらがあがろうがさがろうが、
世界の苦痛は減りはしない。

だから、じっと寝てしまわないで、戦え。
おまえの力を働かしていることが、神の意志だ。

だが、おまえの戦いが無敵の勝利を得ようと、
世界のハートは、かかわりなく、打ちつづけている。」 (5)

このような心情を開戦直後にすでにもっており、それを戦争に熱狂している同朋ドイツ人に対して、上述の「新チューリッヒ新聞」への小論文の発表は、たちまちはげしい反発と抗議をまねくことになりました。彼を支持してくれたのは、ほんの少数のドイツ人*(ここでとりあげた、テオドル・ホイスはその一人)であって、ヘッセは孤立する立場となった。また、彼は1915年8月には兵士として招集されたが、スイスの有力な人々と関係が深かったので、ベルン公使館で囑託として非軍事的な仕事にたずさわることになって、ドイツ人捕虜保護センターで、ドイツ軍捕虜のために奉仕することとなった。その当時のことを振り返ったヘルマン・ヘッセ自身の本『自伝素描』(Kurzgefasster Lebenslauf: 1924年)の次のような文章を引用しておこう。

……この訴えの結果、わたしは祖国の新聞で裏切りものと宣告されるにいたった。……新聞には友人がたくさんいると思っていたのに、彼らのうちわたしをあえて弁護したのは、ただ二人きりだった。旧友たちは、今までわたしというヘビを胸に養っていたのだ、この胸は今後カイゼルと国家のためにだけ鼓動し、わたしのようなできそこないのためにはもはや鼓動しないと、私に告げた。……しかし今後は内省が行われずにはいなかった。いくばくもなくわたしは、自分の苦しみの責任を自分の外部ではなく、自己の内部に求めるように強いられているのを知った。なぜなら、全世界の狂気と粗暴とを非難する権利は、人間にも神にもなく、またわたしにはないことを悟ったからである。 (6)

このような孤独のなかにいるヘッセに、ドイツの敵国であったフランス側から(当時、ロランは祖国フランスから追われてスイスに亡命をよぎなくされていた。)賛同者があらわれたのである。それは「ジャン・クリストフ」等、すでに作家として名をなしていた、ロマン・ロランであった。その後、ながく友情を結ぶことになり、『ヘルマン・ヘッセ ロマン・ロラン 往復書簡』になって結実している。

(ジュネーヴ、1915年) 2月26日(捕虜事務局)

拝啓

二月十八日の「ノイエ・チュールヘア・ツァイトゥング」紙のあなたの文章を私は知りました。心をこめてお手を握ります。すでに久しく以前から、——私があなたのご本を拝読したときから、そして殊にこの擾乱の真只中で、憎しみの雲を消し散らすあの言葉、何ものにも心をとらわれて

* ヘルマン・ヘッセ研究家のベルンハルト・ツェラー氏によれば三人：コンラート・ハウスマン、ヘルマン・ミッセンハルター、テオドル・ホイス。

いないベートーヴェンのあの言葉をもう一度あなたが口にされるのを聞きしたあの日から、私はあなたと握手しようと思っていました。私たちには諸国家の狂乱を停止させることはできません。それどころか、それがなおいっそうひどくなるのではないかと私はおそれています。しかも、どの国の民衆も意見を述べることができずにいます。彼らはほとんど考えることもできないのです(彼らには考えるだけの余裕も能力も与えられていないのです)。それだけにいっそう私たちは互いの結合を強めなければなりません。——すべての国々の中で、この癡猛な狂愚を嫌悪をもって拒んでおり、全ヨーロッパ協調精神の神聖同盟を未来のために擁護することを責務とする私たちすべてが。もし戦争が永びくなら、私たちは、あらゆる国の自由な考えの人々の間に、純粋に精神的なこの結合をいっそう確かなものに行かなければなるまいと私は思っています。どうか、私の心からの共感をお信じ下さいますように。

ロマン・ロラン

ジュネーブ・ホテル・ポーセジュールニジャンベル (7)

ベルン・メルヒエンビュールヴェーク 26

1915年2月28日

敬愛するロラン様

あなたのうれしいお手紙が私の手許にとどきました。私はほんとうに心からよろこんでいます

……

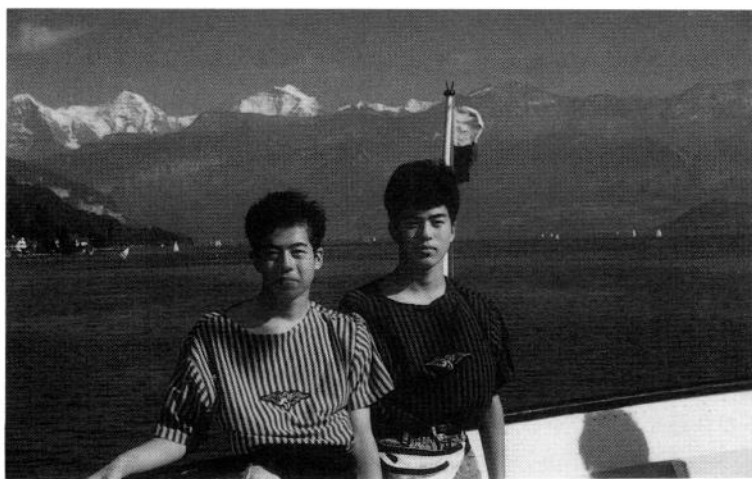
国家を超えている問題について考える人々の意志の疎通をさえぎっている愚かな憎悪心を、私もまだどれほど残念に思っているかはあなたもご存じです。あなたの言われる《全ヨーロッパ協調精神の同盟》がどうしても作られねばならぬとの認識がやがて強くめざめてくるでしょう。しかし私は今のところ、政治的などんな発言もしないつもりです。なぜなら、善意からのどんな呼びかけも、まるで悪意の魔法にかけられたかのように何かしら敵意を起こすものになってしまうからです。憎しみがまだ支配的です。しかしこれもやがて衰えるでしょう。私の書物をあなたが識っていただけることを知りうれしく思います。ですから今後は、ジャン・クリストフの子供時代の物語を、とりわけ、私がどれほど深く愛しているかをどうかご想像下さい。

敬愛をこめてご挨拶します。

あなたのH・ヘッセ (8)

ロマン・ロランの手紙からはじまった二人の交友関係は、ベルンの近く、ツーン湖畔の町、ツーンに滞在していたロマン・ロランが、ベルン郊外のヘッセの家を訪ねて来たのが、1915年8月12日であった。ベルン郊外の家の様子は彼の『思い出集』に次のように描写されている。

ベルン郊外で、ヴィティヒコークエン城のかみ手にある、メルヒエンビュールヴェークの家は、



写真(4) ツーンからユング・フラウ連峰をのぞむ

実際すべての点で、わたしたちのような種類の人間にとって理想的な家としてパーゼル時代からしだいに固まっていた古いイメージの実現であった。……南向きの広いヴェランダのまわりには巨大なふじがはびこっていた。そこからは、近隣とたくさんの森の丘を越えて、山が見渡せた。ツーンの前山地帯からヴェッターホルン峰までユングフラウ群峰の巨山を中心に、連峰がみな見えた。(9)

8月12日の楽しい午後のお会いは、彼等の書簡の中に記されていますが、ヘッセはその8月末に兵士として招集されたのち、在ベルンドイツ兵捕りょ保護センターに勤めることとなったのである。この仕事は1919年のはじめまで続いた。このセンターの長はスイス人の動物学者ヴォルテレク教授で、フランス・アメリカ・スイスのドイツ人捕虜に書物や読書を提供することがその仕事であったが、公けの募金がたちまちなくなってしまったので、その後の仕事は二人の全く個人的責任で行われた。ヘッセは友人知人をはじめ、図書館長や出版社などにあてておびたしい手紙を書いて、書物を乞い求めた。ヘッセ=マン往復書簡集に出てくる次の二通の、トーマス・マンの葉書（第一次世界大戦中にはこの二通以外には存在しないし、まだ個人的なつながりも存在しないと推測される。）もそれら一連の仕事に対する返書と思われる。

バート・テルツ 1916年8月2日

敬愛するヘッセ様

お手紙でお申し越しの件に、どうして私が知らぬ顔をしていてよいのでしょうか。私は喜んでお手伝いしたいと思いますし、また、なにかの形でお手伝いできるでしょう。ただ私自身としてはお金ではだめですけども。昨日郵便局でお手紙を入手した時、私はちょうど飢えている同

僚にお金をまたまた送ったところだったのです。私に私的に寄せられる要求が多すぎるのです。けれども、あなたの趣意書を私からほかに、きっと成果があると思われるところに、廻しましょう。それから、フィッシャーへも手紙を書いて、私の本の私への寄贈分をあなたに送らせましょう。私がああなたの献身的な活動を大いに尊敬しているということを信じて下さい。

トーマス・マン 拝

ヘッセ様

パート・テルツ 1916年8月10日

親戚の一人からあなたのために50マルクをだまし取りましたので、お送りしようと思います。ただ、どういう方法で送ったものか、よくわからないでいるのです。しかし、そのうちきっと方法を見つけ出します。フィッシャーには手紙を書いておきました。彼が献本を気持よくくれるとよいのですが！

トーマス・マン (10)

4) トーマス・マン

すでに、ヘルマン・ヘッセの第一次大戦時代の言動については、3)の中で取り上げましたから、同じ時期に、トーマス・マンは何をし、何を考えていたのかを、次に調べておきたいと思えます。トーマス・マンの場合には、ヘッセよりも、より多くのこの戦争に対する意見・主張が書かれた資料が残されている。私の手元にあるものでさえも次のようなものが主たるものである。『書簡集』、1914年11月に出た“Gedanken In Kriege”『戦時の思想』、1915年2月『フリードリヒと1756年の大同盟——時局のための素描』1915年11月から1918年3月まで書き続けられた『非政治の人間の考察』等がある。その中からいくつかを引用して、彼のその時代の主張を理解したいと思う。

まず、1914年8月1日第一次世界大戦が開始された、その前後の様子を、彼の『書簡集』からみてみよう。

ハインリヒ・マン宛て

パート・テルツ 1914年7月30日

トーマス・マン別宅

……きょうの午後、総動員令が下ったというニュースが入りました。むろんそれはすぐ否定されたのですが、この否定もどうやら長く続かないのではないかという感じが抜えません。……

ハインリヒ・マン宛て

パート・テルツ 1914年8月7日 トーマス・マン別宅

……ぼくはいまでも夢を見ているような気持です。でも今となつては、こうなると予想せず、破局の必然性を見抜けなかった自分の不明を恥じる他ありません。何という災厄でしょうか。この災厄が通りすぎたあと、精神的にも物質的にも、ヨーロッパはどうなっているのでしょうか？

ぼく個人としては、自分の生活の経済的基盤の根本的改革の準備をしなければなりません。戦争が長引けば、かなりの確率で、いわゆる「没落」の状態におちいることでしょう。しかし、そんなことは取るにも足りぬ此事にすぎません。いまのような情勢の結果として世界的な規模で起るに違いない——ことに精神的な——変革に比べたら、そんなことは物の数でもありません。われわれはむしろ、こういう大事件を身をもって経験することを許されるというまったく予期せざる幸運に感謝しなければならないのではないのでしょうか？ ぼくの心を占めているのは、熾烈な好奇心と、それに——あえて白状しますが——運命を謎にみち、世界中の憎まれ者になっているこのドイツにたいする無限の共感です。ドイツは、これまでたしかに「文明」というものを最高のものとは考えてきませんでした。いまや、世界中でもっとも悪評高い警察国家を粉碎しようとしていることだけは確かなのですから。…… (11)

すでに、トーマス・マンは上記の兄ハインリヒに宛てたこの書簡の中で、明白に「世界中の憎まれ者になっているこのドイツにたいする無限の共感です。」とこの大戦のドイツの立場の支持を表明しています。又、1914年11月に発表された『戦時の思想』の中で次のように書いている。

Daß deutsches Wesen quälend problematisch ist, wer wollte es leugnen! Es ist nicht einfach, ein Deutscher zu sein, — nicht so bequem, wie es ist, als Engländer, bei weitem eine so distinkte und heitere Sache nicht, wie es ist, auf französisch zu leben. Das Volk hat es schwer mit sich selbst, es findet sich fragwürdig, es leidet zu weilen an sich bis zum Ekel; aber noch immer, unter Individuen wie Völkern, waren diejenigen die wertvollsten, dies es am schwersten hatten, und wer da wünscht, daß deutsche Art zugunsten von *humanité* und *raison* oder gar von *cant* von der Erde verschwinde, der frevelt,…… (12)

「ドイツ人であることは、容易なことではない。イギリス人であるように快適なことでもなければ、フランス語で生活するように明快で愉快なことでもおよそない……。しかし、だからといって、〈人間性〉や〈理性〉や、いわんや〈偽善〉のためにドイツ的特性が地上から消滅することを望む者は、とんでもない犯罪を働く者である。」……ドイツの勝利のみがヨーロッパの平和を保証し、ドイツ的魂の保持と発展だけが、彼が〈文化〉Kultur と呼ぶ深みのある良風の増大を意味すると、彼は主張している。重ねてもう一度、戦争開始直後の彼の兄ハインリヒに宛てた手紙を引用しておこう。

ミュンヘン 1914年9月18日 ポッシング通り1

〈……〉御自分の作品とその将来についての兄さんの悲観的な見方には賛成できません。そういう考えは、ドイツ人の教養というものを不当に低く評価した考え方です。兄さんの文名はここ十年間にぐんぐん上がってきました。兄さんは、荘厳で偉大でじつにまともなこの民俗戦争の結

果、ドイツの文化ないし教養は酷く後退し、自分の才能は永遠に受け入れられなくなるかも知れないなどと、本気で信じているのですか？ (13)

トーマス・マンにとって、第一次世界大戦は、資本主義国家間の市場獲得の戦争とも、海外植民地をかけた戦争とも思っていないようだ。そして「政治」とは「デモクラシー」、ことに英仏的政治形態としてのデモクラシーであって、「ドイツの国家形態」とはあいられないものであり、プロテストするドイツを支持しなければならないという主張のようである。そういう認識によるマンの発言に対して、二人の強力な反論がたちまち返ってくる。一人は、フランス人のロマン・ロランから、そしてもう一人は、身内の兄ハインリッヒからのものである。そのことによってマンは作家として、作品を中断してでも論争に引き入れられていった。それが「ある非政治的人間の考察」である。ロマン・ロランは「ノイエ・レントャウ」誌（1916年11月号）にのった「戦時の考察」に対して次のように、はげしい非難をあげている。

……これは私が今日までに読んだドイツの知識人の書いたもののなかでいちばん恐ろしいものである。……と。 (14)

5) む す び

以上、第一次大戦をめぐる、マンとヘッセの主張は明白に反対の側にあったと云うことができよう。終生の友情に結ばれるには、まだ永い時間が必要であり、マン自身の側により多くの変化が生じなければならないだろう。

注

- 1) トーマス・マン日記1933—1934 岩田行一他訳 紀伊国屋書店 S. 201
- 2) 同上 S. 202
- 3) 戦争と平和 ヘルマン・ヘッセ著・芳賀壇訳 人文書院 S. 15—S. 16
- 4) Hermann Hesse Gesammelte Briefe—Erster Band 1895—1921 Suhrkamp S. 257—S. 258
- 5) ヘルマン・ヘッセ全集13 詩集 高橋健二訳 新潮社 S. 106—S. 107
- 6) ヘルマン・ヘッセ全集5 高橋健二訳 新潮社 S. 294—S. 295
- 7) ヘルマン・ヘッセ＝ロマン・ロラン往復書簡集 片山敏彦他訳 みすず書房 S. 10
- 8) 同上
- 9) ヘルマン・ヘッセ全集8 S. 295
- 10) ヘッセ＝マン往復書簡集 井手貞夫 青柳謙二訳 筑摩書房 S. 6—S. 7
- 11) トーマス・マン全集 XII 「書簡」 新潮社 S. 114—S. 115
- 12) Thomas Mann Essays Band 2 Politik Fischer S. 36
- 13) トーマス・マン全集 XII 「書簡」 新潮社 S. 116
- 14) ロマン・ロラン全集 戦時の日記1 みすず書房 S. 124